

# 港湾振興便り



2025. 4

第215号

\*:\*

## 目 次

\*:\*\*

1 ポートエッセイ ー潟と渡り鳥、国境を越えてー  
～ 日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 中原 八一 ～

## 2 トピック

- みなとオアシスるもい運営協議会が港湾協力団体に指定されました！  
(留萌市 地域振興部 港湾・再生可能エネルギー室)
- 「鹿島港洋上風力発電セミナー」を開催！  
(関東地方整備局 鹿島港湾・空港整備事務所)
- 能登半島地震で被災した直江津港岸壁の本復旧工事が完了し大型貨物船の利用が再開しました！  
(北陸地方整備局 新潟港湾・空港整備事務所)
- 志布志市立安楽小学校5年生38人と消波ブロックにペイント「世界に一つだけのブロック」  
～志布志港の未来の海に願いを込めて～  
(九州地方整備局 志布志港湾事務所)

\*:\*

## 1 ポートエッセイ 一 潟と渡り鳥、国境を越えて一

～ 日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 中原 八一 ～

\*:\*

春の訪れとともに冬の使者白鳥が北へ帰っていった。新潟市はたくさんの白鳥が冬にシベリアから渡って来る。新潟市は信濃川と阿賀野川という二大河川の河口に位置し、河川が運ぶ土砂により、海岸砂丘が形成され、水はけの悪い土地が多くの「潟」となった。河川改修や新田開発等の開拓により数は減ったものの現在も多くの潟湖があり、白鳥や多くの渡り鳥が一冬を越す大切な場所として存在している。

その潟湖の一つに、新潟市西区の「佐潟(さがた)」がある。ここは1996年に「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」いわゆる「ラムサール条約」に登録された。この佐潟をはじめ16の潟のある新潟市は2022年には湿地の保全・再生、管理に取り組む「ラムサール条約湿地自治体」に鹿児島県出水市とともに国内で初めて認証された。

また、2026年に開催予定の「世界湿地都市ネットワーク市長会議」の開催地に国内で初めて選ばれた。この会議はラムサール条約湿地自治体認証を受けた都市による国際会議で、湿地都市間での交流や情報発信を目的としている。これを好機と捉え、潟などの価値を再認識し、世界に誇る「国際湿地都市 NIIGATA」のブランドの確立に向けた取り組みを強化していきたい。

渡り鳥は、いにしえより国を跨いだ「渡り」を繰り返してきた。鳥が移動する道には、国境は存在しない。国境に関係なく自由に渡っていく。

人類もまた、かつては国境という概念を持ってはいなかった。しかし、いつしか線を引き、領域を定め、それを守るために多くの労力と争いを重ねてきた。その結果、分断・紛争・戦争という悲劇を繰り返してきた。グローバル化が進み、経済的には多くの国が互いに依存し合い、技術の進歩により人々や情報が瞬時に世界を駆け巡るようになった現在、経済や文化面での国境の壁は低くなった。しかし、それでもなお、国境は依然として政治的・軍事的緊張を生み出している。

戦争や紛争が完全になくなることは容易ではない。完璧な解決策はないが、平和を願い続けることは大切にしたい。

\*:\*

## 2 トピック

\*:\*

### ●みなとオアシスるもい運営協議会が港湾協力団体に指定されました！

(留萌市 地域振興部 港湾・再生可能エネルギー室)

留萌港の港湾管理者である留萌市は、「みなとオアシスるもい運営協議会」を港湾協力団体に指定しました。

令和7年3月19日(水)、指定証の手交式が留萌市役所市長室で行われ、留萌市の中西市長から、みなとオアシスるもい運営協議会佐藤会長へ指定証が手渡されました。

佐藤会長は「留萌は港から始まった都市といっても過言ではなく、当協議会としても地域内での港湾の利活用や親水性のアプローチなど、再来年の開港90年に目掛けてますます活動を活発化させていきたい。」と今後の活動への意欲を述べられました。

「みなとオアシスるもい運営協議会」は令和2年に発足し、これまで、みなとオアシスるもいのPR活動、留萌港の清掃事業、「うまいよ！るもい市」開催に併せた「留萌港みなと見学会」の開催など、みなとを核としたにぎわい創出のための活動を実施しており、今回の指定により、イベント実施時に港湾管理者との調整が円滑に進むことで、留萌港の更なる活性化が期待されます。



指定証手交式の様子  
(左:中西市長 右:佐藤会長)



みなとオアシスるもい運営協議会の活動  
Port Clean in 留萌(清掃事業)

●「鹿島港洋上風力発電セミナー」を開催！

(関東地方整備局鹿島港湾・空港整備事務所)

2月15日(土)、茨城県神栖市のアートホテル鹿島セントラルにおいて、「鹿島港洋上風力発電セミナー」を開催し、地元企業などの代表者ら約200名の方に出席いただきました。

セミナーでは、鹿島港外港地区の基地港湾の完成報告と、本省港湾局より最新の洋上風力の動向や、茨城県、鹿嶋市の取組紹介等を実施しました。

出席された方からは、「鹿島港を拠点に、鹿島港から銚子・九十九里沖までに至る海上エリアが日本の洋上風力発電の代表格として、首都圏のグリーン電力需要を支える有用な拠点」、「今後のカーボンニュートラルポートの推進にますます期待。エネルギー構造転換の起爆剤として、脱炭素電源の推進に大きく貢献する鹿島港洋上風力発電のこれからの発展に心から期待」等の基地港湾整備を通じた鹿島港の更なる発展に向けて期待の声が寄せられました。

鹿島港は日本を代表するコンビナートを支える港として発展して参りましたが、今後は、洋上風力発電関連企業の新規立地等による経済波及効果や雇用創出効果により、地域経済の発展に寄与して参ります。



セミナーの様子



工事完成した基地港湾



基地港湾利用イメージ

●能登半島地震で被災した直江津港岸壁の本復旧工事が完了し大型貨物船の利用が再開しました！

(北陸地方整備局 新潟港湾・空港整備事務所)

令和6年能登半島地震で被災した直江津港(新潟県上越市)中央ふ頭鉱産品岸壁の本復旧工事が完成し、3月12日より再開した荷役作業を報道関係者に公開しました。

復旧した同岸壁は、直江津港の公共岸壁では最大規模の延長 270m、水深-13m で、大型貨物船が利用する岸壁です。今回の地震により岸壁エプロンやふ頭用地に液状化が生じ、コンクリート舗装のひび割れ、段差、空洞化など被災により、船舶からの荷役が不可能になっていましたが、本年 1 月に直轄災害復旧事業により岸壁部が完成し、また、港湾機能復旧推進事業によりふ頭用地も一部完成しました。

本岸壁は利用者からの早期の機能回復が望まれており、大型貨物船での荷役が再開したことで、製造業を主とする地域産業への影響が緩和されました。当日はあいにくの雨模様となりましたが、多くの報道機関の参加があり、直江津港復旧への関心の高さが窺えました。



被災直後の様子



当日の取材対応の様子



本復旧工事完了後の様子

●志布志市立安楽小学校5年生38人と消波ブロックにペイント「世界に一つだけのブロック」  
～志布志港の未来の海に願いを込めて～

(九州地方整備局 志布志港湾事務所)

令和7年3月6日(木)に九州地方整備局志布志港湾事務所は地元の安楽小学校5年生38人を招いて消波ブロックペイントイベントを開催しました。

志布志港には工事作業現場の危険な場所やブロック仮置き場所など立ち入るのが難しい場所もありますが、港をもっと知ってほしい、親しんでもらいたいとの思いからこのイベントを企画しました。

イベント会場では注意事項を説明し、小学生たちには服が汚れないようにレインコートを着用してもらい、好きな色のペンキを受け取ってもらいました。その後、高さ、幅ともに約4メートルある消波ブロックへと思い思いに未来の海への願いを込めた絵を描いてもらいました。参加した小学生からは「想像していたより消波ブロックが大きくて絵を描くのが楽しかった」、「少しでも賑やかになって見た人が元気になってほしい」との声をもらいました。今後も港に興味をもってもらえるような機会を企画していきたいです。



楽しそうに刷毛を取りペイント開始



自慢の絵を大きく書く小学生たち



小学生が書いてくれた絵をご紹介します



最後はみんなで集合写真！

